

誰がこれを造ったのか

— 社会への責任、そして次世代へのメッセージ —

平成20年度 土木学会会長提言 より

第1回

土木学会では本年5月、「誰がこれを造ったのか」と題する平成20年度土木学会会長提言をまとめた。「技術者の責任を明確にして人々の信頼感を高め、また身近に技術者の存在を感じて次世代の若者たちが土木界の継承者となる志を持つことを期待して、土木構造物に関わった技術者の名前を明らかにする」という今回の提言は、土木事業に対する国民の理解が必ずしも十分ではない今日、意味が大きいと考ええる。そこで全5回にわたってこの問題を取り上げることとした。

第1回は今回の提言の背景等を述べ、第2回から4回までは「土木の無名性」に関するさまざまな論点を紹介し、第5回（最終回）に全体を取りまとめる構成を予定している。

提言の背景

(社)日本港湾協会会長
(社)土木学会 平成20年度会長
栢原 英郎

はじめに

1980年代の初めの頃シカゴを訪れた。案内してくれたアメリカ人女性が、街を通り抜けながら「これはジョン・ハンコック・センター。ファズラー・カーンの設計」「このビルはマリーナ・シティ。設計者はゴールドバーク」と、超高層ビルの名前だけではなく設計者の名前を次々と紹介してくれた。「建築に興味があるのか」と尋ねると、「シカゴでは誰でも知っていることです」という答えだった。

我が国でも状況は似ている。東京都庁を見れば丹下健三、東京文化会館を見れば前川国男といった建築家の名前が頭に浮かぶ。マスコミも同じである。「ル・コルビジエの国立西洋美術館」と設計者を付記するし、

ニューヨークのワールドトレードセンターがテロに攻撃されたとき、ビルの設計者の一人がミノル・ヤマサキ氏であることが繰り返し語られた。

ひるがえって、土木構造物についてはどうであろうか。我が国でもっとも著名な土木構造物の一つといって良い黒四ダムは設計者は誰で工事は誰が指揮をとったのか。一般の人はもちろん、土木技術者ですら答えることができない。土木構造物の多くは構造物の名前だけが紹介されて、それに関与した技術者の名前が語られることはほとんど無い。提言ではこれを「土木の無名性」と呼ぶこととした。

土木学会では、早急に解決しなければならない課題を取り上げ、そのことに土木学会がどのように取り組んでいくべきであるかを「会長が責任を持って明らかにし、提

言・行動する」という仕組みが平成11年度から稼動している。そこで平成20年度は、「土木の無名性」について幅広く議論し、土木構造物を見たときにそれに関与した技術者の存在が意識されるための方策を検討することとした。

検討の仕組みと経過

検討は新たに組織した特別委員会と幹事会により行われた。検討委員会と幹事会の構成は表に示すとおりであり、総勢20名、うち女性が2人、土木技術者以外が1名である。

特別委員会では、技術者の名前が明示されている事例を集め、それらを参考にしながら明示の目的、方法などについて議論を

重ねた。また、土木学会全国大会（仙台市）における会長講演「誰がこれを造ったのか」や国際部門のラウンドテーブルミーティング、土木の日シンポジウム「匿名性からの脱却」、さらには大韓土木学会年次総会（韓国・太田市）における招待講演「Who constructed it?」など、様々な機会をとらえて意見交換を行った。

土木の無名性の背景とそれがもたらしているもの

土木の世界の無名性は、古くからのものではない。満濃池等の歴史的な構造物のみならず、明治時代から第二次世界大戦以前の構造物には、完成時に代表的な技術者の名前が明示されているものが多く見られる。しかし、第二次世界大戦後の我が国の

表 平成20年度会長提言特別委員会

役 職	氏 名	所 属
委員長	栢原 英郎	(社)日本港湾協会 会長
委 員	天野 玲子	鹿島建設(株)土木管理本部土木技術部 部長
委 員	家田 仁	東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 教授
委 員	岩崎 恵美子	仙台市 副市長
委 員	日下部 治	東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻 教授
委 員	谷口 博昭	国土交通省 技監
委 員	廣谷 彰彦	(株)オリエンタルコンサルタンツ 代表取締役社長
委 員	古木 守靖	(社)土木学会 専務理事
委 員	山川 朝生	(社)国際建設技術協会 理事長
委 員	山本 卓朗	鉄建建設(株) 特別顧問
委 員	吉越 洋	東京電力(株) 顧問
幹事長	鬼頭 平三	(社)日本港湾協会 理事長
幹 事	池田 豊人	国土交通省大臣官房技術調査課 技術企画官
幹 事	浦瀬 太郎	東京工科大学応用生物学部 教授
幹 事	崎本 繁治	(株)オリエンタルコンサルタンツ執行役員 国土基盤事業部長
幹 事	佐藤 恒夫	(社)土木学会 技術推進機構長
幹 事	高久 雅喜	大成建設(株)プロジェクト部 次長
幹 事	堀部 慶次	東京電力(株)建設部 建設企画グループマネージャー
幹 事	三上 圭一	国土交通省大臣官房 公共事業調査室長
幹 事	美谷 邦章	東日本旅客鉄道(株)東京工事事務所 開発調査室長

※委員長以外の委員，幹事長以外の幹事はそれぞれ五十音順。役職は当時。

高度経済成長期に、不足している社会資本を短期間に整備するために集中的な投資が行われ、それを効率的に進めるために、技術や構造物の標準化とこれを規定する法の整備などが進み、構造物に現れる個々の技術者の個性が薄れるにつれて、急速に土木技術者の名前が明示されることはなくなっていった。

このことが土木の世界で定着し、長い間疑問が挟まれなかったことには、次のような理由もあると思われる。

まず、一つの土木構造物が完成に至るまでには、構想・企画から完成まで多年に亘り多くの技術者が関与しており、代表となる技術者を特定することの難しさがある。さらに土木構造物を構築するためにはチームワークが重要で、プロジェクトを統括する技術者から現場の作業員まで全員が主役であってヒーローを作らないことが望ましいとし、そのことに意気を感じてきた土木技術者のロマンも、無名性を支えてきた強い要素となっている。

さらに、土木構造物の巨大さや相手にしている自然への畏敬の念から、あるいは造り上げた構造物に意味があるのではなく、それが提供する機能にこそ意味があるという価値観から、さらには土木構造物の多くが公共事業あるいは公益的な事業として築造されることから、企業名や技術者名を記すことを控えてきたことも考えられる。

しかし、「誰が造ったのか」を社会に明らかにしてこなかったことによって、責任があいまいにされていると受け止められて土木や公共事業に対する不信を助長し、構造物の重要性も理解されず、その結果土木技

術者の存在そのものが社会に埋もれてしまっている。さらに、土木構造物の巨大さや美しさ、その働きに感動した時に、それに関わった技術者の存在を知ることができないことによって、若い世代がこの世界を志す機会を葬り去っていることも危惧される。

提言の内容

検討委員会の結論は、無名性を支えてきた考え方を尊重しつつも、無名性が続いたため現在我々が置かれている状況を考えると、土木構造物あるいはプロジェクトの完成時にその傍らに関わった土木技術者を明らかにすることが望ましいということである。なおこれは、関わった土木技術者の顕彰を意図したものではない。顕彰は一定の時間が経過した後、社会などから高く評価されたことを受けて、関係者があるいは第三者が行うものであり、今回の提言は社会への責任として関わった技術者を明示することが目的である。

その方法としては、土木構造物の完成時に、「土木構造物あるいはプロジェクトの名称」、「完成時期あるいは工期」、「事業主体」、「目的」とともに、「設計会社名及び実質的な責任技術者名」、「施工会社名及び実質的な責任技術者名」、「技術的特長」などを記した銘板を設置することを提案することとなった。既に国土交通省においては、平成21年4月から「技術者名を明示すること」が仕様書に記載され、制度化されている。逸早い決断に敬意を払い、感謝を申し上げたい。

コラム

ワバシュ通り橋—シカゴの町と橋

(社)土木学会 専務理事 古木守靖

アメリカで町を散歩していて、気になる建物や構造物に近寄ると、必ずといっていいほど、黒い背景に浮き上がった金色の文字で、その由来や建設にかかわった関係者の名前などが記された金属の銘板を発見する。現在シカゴのシンボルとなっているウォータータワーと呼ばれるクラシックな建物もその例に漏れない。ウォータータワーは、9万人以上が焼け出された1971年シカゴ大火に唯一耐えて残った建物である。

4年前にシカゴを訪問した際、偶然この建物に埋め込まれた銘板が目にとまり、それが町のシンボルであることを知った。そこで町を見渡すと建物は言うに及ばず、橋梁そして歩道に至るまで銘板が埋め込まれていることに気が付いた。

その一つが、写真1のワバシュ通り橋だ。構造的には中路トラスで、特段目立つデザインではないが、よく見ると巨大な親柱のようなものが橋のたもとにあり、中央に切れ目がある。つまり中央から跳ね上がる跳ね橋で、親柱状のものは開閉の操作室なのだ。

この操作室の外壁に写真2のような立派な銘板が掲げられている。

これによると1930年の建設だ。そして市長、市の公共事業局長、副局長、コンサルティング技術者、市の技術者、橋梁技術者、橋梁設計者、建設工事業者名などが記されている。さらにこの銘板の下には1930年にアメリカ鋼建設学会（AISC）から「最も美しい橋梁賞」を受賞したことを記す銘板もはめ込まれている。当時は最先端の設計だったのだ。

これらの技術者は今もインターネットで検索できるし、活躍の様子を彷彿とさせる記事や書物が出てくる。更に興味深いのは、NPOが、ワバシュ通り橋を含めてシカゴは言うに及ばず、全米の歴史的な橋をデータベース化して情報提供し、その適切な保存運動を展開していることだ（参考：Historic Bridges <http://www.historicbridges.org/>）。

私にとってウォータータワー、そしてこの橋の一枚の銘板との出会いが、シカゴの技術者達やシカゴの橋梁への、更には橋梁保存運動に対する興味を持つきっかけとなったが、おそらくアメリカ国民にとっても同様のことがおきているだろう。

わが国でも国交省により類似の銘板設置の施策が始まった。構造物に設置される銘板上の技術者の名前も市民の目に触れ、市民、特に若い人たちの土木への関心と呼び起こすきっかけとなることを心より期待する。



写真1 シカゴ市内ワバシュ通り橋
橋の端の小さな塔のようなものは開閉操作室、下がシカゴ川。



写真2 ワバシュ通り橋の銘板